

日本基督教団 東中国教区ニュース

NEWS

東中国教区
教区ニュース読者委員会
〒710-0008
倉敷市鶴形一五五
倉敷キリスト教会館内
TEL:086-421-1780

教会紹介 新見教会

「ともしび」

新見教会は創立八四年を迎え、はじめて新見市の中心部、「中町」に土地付き一戸建中古住宅を取得いたしました。九月からこの新しい教会堂で礼拝が行われます。思えば、長く荒野をさまよった気がいたします。二、三年ごとに代務者が代わり無牧の



時代も経てきました。その度に不協和音も乗り越えてきました。二〇一二年二月、前任代務者の辞任により、またもや無牧となり、あやうく離散、解散に迫

いこまれ、創立当初からの借地の返却を求められ、西方の地を最後に会堂を失いましたが、長谷川清、睦子姉妹の宅をお借りし、それはとても素晴らしい会堂で二〇一三年度より第一土曜日、第三土曜日に礼拝と守ることができました。前・小松茂夫教区議長が、訪ねてくださり、そのうえ、代務者となってくくださり、献身的な牧会がなされたのです。数多くの未解決の問題を整えてくださり、在任中の二年半の間に、一名の受洗者、一名の病床洗礼者が与えられました。また、一時は教会唯一の財産である墓地の処分まで考えましたが、復活させ、永眠者墓碑も代務者の指導によって、長谷川兄が完成の労をとり、折りしも、一姉妹が召され、前代務者によって、その墓地へ葬送することができました。

県北の弱小教会は、苦難に耐えながら、綱渡りのような道を強いられながら、ともしびを守りつづけてきました。前代務者の「弱小教会は、代務者が変わるごとに左右されるのは仕方のないことだが、新見教会としての方針を持ち、ともしびを守るように」との励ましに支えられ、祈ってきました。少人数で絶えずともしびを守ることは、なかなかむずかしいことです。一陣の風、ただ一滴の雨、それだけで、五名の信徒は崩れそうでした。けれど、一番貴重なもの、強かったものは、キリストの愛が各自の内

に燃えつづけていたことだったと思います。ともしびを消さぬこと、それだけのことと見えて、かなり苦しい仕事であります。

無牧の時は、肩を寄せあいテープ礼拝を守ってきました。ともしびは、ゆれましたが、病める兄弟姉妹を祈り見舞ってきました。五月末日で前小松牧師が辞され、六月よりは児島教会の、笹井健匡牧師が代務となられました。新しい教会への手続き、宗教法への段取り、主として、長谷川兄弟が労をとられ感謝でした。前代務者の導きに従い、月一度の聖餐式、誕生祝福、平等に発言できるコイノニア、受け継いでいまい。地区、教区の交わりにも参加するようになり、有形無形の支えを受けていることを感謝しております。

現在、過疎化はますます進み、高齢化の時代、暗闇に閉ざされたこの地に、新しい教会堂は、新しいともしびとして輝くよう願っております。イエス・キリストはともしびとしてこの世にきてくださいました。この小さな新見の地にもきてくださったのです。このともしびを大切に守りながら、生きていくことが、聖書の教える信仰であると学びました。いつも、このともしびを灯し、守っていかうと再出発したのです。

ラーゲルレーヴは、キリスト伝説集の中にある「ともしび」の主人公、ラニエロに「この旅はなかなか日かすをくった。天

教会紹介・新見教会	1
教会紹介・高倉教会	2
第一回宣教会議報告	3
エッセイ「新しい創造論を始めよう」	5
岡山県西部地区の夏期学校について	6
岡山県中部地区における夏期伝道実習のご報告	7
編集後記	8

気の悪い日は外を歩けないことも関係した。ともしびを守ることはつらい苦しい毎日だった」と言わせています。ラニエロは、エルサレムから聖火をもって、フィレンツェについて帰ってきたというストーリーです。私たちに新見教会員も同じく、ここまでたどりつくには、召された先達信徒の祈りとともに、苦難の日々を主と共に歩いたから、歩んでこられたのだと思っております。

会堂購入費は、教会会計の積み立てと、自主献金により、他者に依存することはありませんでした。その事によってもしびがゆらぐことはありませんでした。私たちの不安とこの時代をおおっている闇をうち払い平和と喜びを持つ力を、このともしびは持っているからです。イエスさまのともしびを一人でも多くの人に伝えていきたいと願っています。今年度の新見教会の標語は「御言葉に励まされてキリストを宣べ伝える」、前代務者と共に決めました。離散か解散かとせまられた新見教会は、今長年の祈りが聞かれ、土地、会堂ともに、新しく生まれ変わりました。

イスラエルの民は実際弱く小さな民と聞きました。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。・・・あなたが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちはほかのどの民よりも貧弱であった」(申命記)との御言葉に支えられ新たな力を得て成長し、福音のともしびを消すことがないよう、宣教の業が進められるよう切実な思いを与えられております。(田中郁子)

★セクシユアル・ハラスメント相談窓口
毎月第3水曜日 午前9時～午後9時
電話番号 090-11330-8730

高倉教会

「高倉教会のご紹介」～合併を経て～

高倉教会は、津山福音教会(創立三十七年・津山市街地)と高倉教会(創立六三周年・津山市農村部)が、二〇一五年四月一日に合併し誕生しました。両教会は、創立から合わせて一〇〇周年、平均すると五〇周年になります。新教会の名称は、二〇一五年度中には、教会協議会で話し合い、役員会、臨時総会を経て決定する予定です。六三年、三七年間のお祈りの中で、生まれた教会です。

合併の経緯は、二〇一三年一二月はじめに、中島献二副牧師が体調不良で説教することが困難となり、当時の高倉教会主任牧師永倉信嗣先生のご助言により、二〇一四年一月の新年礼拝から、高倉教会において、両教会の合同礼拝を高倉で日曜日の午前一〇時半からお捧げし、木曜日の祈禱会は津山福音で木曜日の午後七時半から行うことが始まりました。

旧高倉教会は、地元出身で在米の金谷雅一・文子ご夫妻が、「郷里に教会を」というビジョンを与えられ、土地と建物を献げられて生まれた教会で、地元の方と併設する高倉ひかり保育園の職員が主な礼拝出席者。津山福音教会は、中島幸一郎牧師の「開拓伝道」により始められた教会で、借家を

転々とする中、七DKの大きな借家をお借りすることができ、津山市内はもとより、東京都、大阪府、滋賀県、兵庫県、香川県、鳥取県からも信徒・客員・求道者の礼拝出席者がある、不思議な教会でした。当時の中島幸一郎牧師と教会員の祈りと牧会、伝道によってそのような形の教会となっていました。合同礼拝を行うようになってからは、三〇名前後で礼拝をお捧げできるようになり、それまで以上に皆さん喜んで礼拝に来られるようになりました。高倉教会には、広い母子室も完備しており、駐車場は、七〇台分あります。

礼拝堂(保育園ホール)も、四年前に改装し、快適な会場となっております。

合同礼拝を始めて、一年が経過した頃、中島献二副牧師の体調も改善の方向に進み「そろそろ合併し、高倉の地で、一つの教会として再出発しては」という機運がうまれ、二〇一五年一月の臨時教会総会に於いて、二〇一五年三月三十一日付け中島幸一郎牧師の両教会牧師の辞任と隠退、高倉教会の名誉牧師就任、永倉信嗣先生の高倉教会(兼務)主任牧師退任、中島献二副牧師の両教会主任牧師就任、二〇一五年四月一日付け両教会の合併が可決されました。合併式・就任式は、二〇一五年六月二八日の聖日礼拝の中で、岡山聖心教会主任牧師永倉信嗣先生に執行して頂き、教区内外の諸教会にハガキにて合併と就任のお知らせをしました。

わたしたちの教会は、
一) 礼拝においては「沈黙の祈り」家庭では「密室の祈り」を重んじる教会とさせていただきます。



津山福音教会・高倉教会 合併記念

2015年6月28日

二) 教会員それぞれが「愛と平和の使者」として、家庭にあつて、地域にあつて、社会にあつて福音の証し人として用いられるように。

この二点に聖霊の御助けを頂くことと、新会堂を献げさせて頂くことが教会の将来に希望を頂くために必須のことだと信じ、歩ませて頂いております。どうか、ご加禱ください。

※なお、以下の写真は、合併式の記念写真と、4月のCS分校(兵庫県佐用町)のイースターたまご探しのあとの記念写真です。



第一回宣教会議報告

於…上井教会
報告…中井大介

去る二〇一五年八月三十一日(月)、上井教会において第一回宣教会議が開催されました。このたびの宣教会議は、先の教区総会における数々の問題提起を受け、教区財政における具体的な施策に結びつけるために、学びと自由な発言の場を設ける目的をもって開催されました。参加者は教区三役、常置委員、各部委員長と地区長を主として十九名。

十一時定刻通りに大塚忍副議長により開会が宣言され、礼拝を執り行い、祈りをもって開始しました。午前中は嵐護議長と柴田彰常置委員による基調講演。

嵐護議長からは「現状の認識・課題への展望」と題して、直近十年の教区における教勢推移の分析がなされ、四十七教会中十五教会が代務及び兼務であり教勢が減少している現状をもとに、東中国教区が諸教会を支えるしくみを何とか検討したいという所信が表明されました。嵐議長の個人的な体験を通して、互いに助け合うという互助や謝儀保障という制度だけではなく、人と人とのつながりを通して伝道が励まされる部分が大切にされてもよいのではないかと語られた後に、教区における信徒は力や賜物を持つており、共にある教会という支え合いの道を歩み始めたいと語られました。続く柴田彰常置委員からも「これまでの教会・これからの教会」と題しての基調講演を頂きました。はじめに二〇〇六年度東中国教区教師研修会の戒能信生牧師によるレポートからの問いかけを聴衆に問われました。それは一九七〇年以降の教勢伸張も特徴はなく、無風教区といわれる東中国教区が、長期的な視野に立ち教区を支える人材を育ててきただろうか、という痛烈なものでした。それと同時に、困難を抱える教会を強化し、支援するしくみの前提として「一教会一牧師」という原則に囚われすぎてはいないだろうか、考えても見なかつた視点が示されました。概念としては伝道圏伝道や共同牧会に近いものです。各教会に一人の牧師がおり、その教会が財政的に自立していることが、教会としての基準である、



と私たちは認識しているけれども、日本伝道の歴史においてキリスト教ブームなどの恵まれた社会状況をのぞいて、そのような基準が満たされた時代は短いものでした。イエス・キリストの宣教、パウロの伝道は常に多様な少数民族を大切にしてきたものであり、多様性が生きる現場が小さくともたくさんあることが、これからの教会の生きる道であると語ります。現在の組織に適した財政を目指すならば、教職制度に依存しない信徒組織による営みを育てていくことも選択肢においておくべきだろうと語られました。教区の各地にある礼拝の民の群れを、様々なつながりによって支えて行く伝道、ネットワーク（「つながり」が「機能する」）を強くすることに教区からの支援

の比重を高めてはいかがだろうかかと語られました。印象的な言葉として「個の量ではなく、個の充実が、その共同体のエネルギー」だと語られ、今ある教会が、今、手にしている賜物を再発見していくことによつて、具体的に地の塩として生きるのだというのです。

その後、三名の方からの発題をいただきます。はじめに濱上進常置委員より「教区負担金について」、続いて森嶋道常置委員より「伝道資金について」、最後には「教会強化献金について」嵐議長よりの発題となりました。

質疑応答を通して活発な発言が続きます。以下、臨場感を感じて頂きたいために会議で語られた言葉を簡条書きでお示しいたします。

- 松田章義さん；議論はたくさんやればよい。これまでは具体化する段階で空中分解してきたけれども、これからは決まったことを一歩ずつ進めていきたい。
- 森嶋道さん；伝道資金についての考え方を研究していくことは有用である。中期宣教計画にあった礼拝サポートも具体化しかけていくし、総社教会の再生ワークショップや、夏期の神学生による伝道実習などにも伝道資金を活用できるだろう。
- 柴田彰さん；教会の高齢化が進むと、教会の雰囲気が好きで教会に集う人が多くなっているのではないだろうか。教会の雰囲気を作り出すための環境整備に力を入れる必要がでてきている。
- 金子直子さん；信徒が育つということは大切なことである。信徒訓練という言葉の響きが気になるのだが、その内実にお

いて信徒がどのように育まれていくのかを検討してほしい。

- 柴田彰さん；教会に加入する人が感じる負担は、今は強いのではないだろうか。ただでさえ、狭き門に入ってきた人を、徹底的に訓練していこうとするのがこれまでの教会である。そうではなくて、来たい人は誰でもおいで、といえる教会の雰囲気づくりが大切だ。

- 濱上進さん；このたびの発題資料を作成するために積み上げた統計資料によって東中国教区の諸教会における献金力の差を見つけることができた。一人当たりの教会への献金を多く献げているところが、教区負担金が重いという傾向が見られる。また、教団の中で十一献金という考え方をどのように伝えるべきか、また伝えざるべきかに悩みつつ過ぎている。このような悩みを分かち合う機会がほしい。
- 柴田彰さん；かつての献金は共同体内の宗教的身分や社会保障の全てが込められていたのだが、現在では行政サービスや他の福祉事業などによって補われていくようになっていく。そうした中で、献金の在り方は変わって当然である。今まで教会員は一生懸命に献げるだけのものを献げてきている。じつはお金のあるところに、人の魂も居心地よく存在できるものである。ならばお金を必要とする場所に、どれだけ自分を献げられるかは、当然、神さまを意識したものとなってくる。
- 森言一郎さん；役員会の合同研修会などが開催され、自他共に各教会が苦勞していることを分かち合い、対話を積み重ねていく機会をもうける必要が感じられる。

- 嵐護さん；財務担当者による研修会が計画されている。その研修が信徒相互の学び合いになるように願っている。
- 柴田彰さん；かつての牧会の現場で病氣の人から「私みたいな者が来てすみません。元氣だったらもつと献金できるのに」といわれた経験がある。教会は強い人しか来られないところだと私たちは思わせてきた。
- 松田章義さん；教会は献金をいっぱい集めることを期待するところ、元氣な人が集まるところ、お金を求められるところ、余裕のない人が来るところ、いろんなことが考えられるが、私たちの求める教会とはどのようなところだろうか。信徒の声を、もつと常置委員会や宣教会議に届けられるような仕組みができないだろうか。濱上進さん；現行規則の中でいろいろな計算方式で試算してみても、全ての教会に主観的な公平感や満足感を与えることは困難だと感じた。結局は恵みに応じて相応な負担（補い）をするという協力姿勢が大切である。それが教区の宣教を支える基本ではないだろうか。今後、規則にこだわらない方式を含めて検討を進めて行く必要がある。
- 柴田彰さん；教団伝道資金は原資が約五千八百万円であり、各教区が要求できる限度額は約五百八十万円。当初から、教団にある十七教区全てが限度額一杯に要求しても応えられない制度設計になっており、制度そのものが破綻している。つまり、この制度に依存しすぎると、制度が変化したり廃棄されるときに教区は会計上大きく揺れることとなる。

- 柴田彰さん；東中国教区には無牧教会が多いので、各教会の献金と伝道資金による交付金を合わせて複数教会を牧会する牧師を雇うという宣教プランが策定されてもよい。
- 森嶋道さん；現在、教区同士のつながりを意識する制度は、これしか残っていない。この制度を育てるようにして教区同士の助け合いを作り出せないだろうか。破綻が想定される制度であるのだから、今のところ有効活用できる方策を検討する必要があるし、ある教区では通常会計に入れずに制度が破綻しても影響がないように準備しているところもある。
- 嵐護さん；このような制度は、必ず揺り戻しがあるし、厳しい方向に傾くことが予想される。身の丈にあった申請をし、厳しいときに教区は自立していけるように備えておくべきである。
- 松田章義さん；将来的には教会強化費の原資をどうするか、きちんと整理しておかなくてはならない。經常会計から捻出して負担金を出すのがよいのかどうかを常置委員会に検討して頂きたい。私自身は、經常会計からの支出でよいと考えている。
- 延藤好英さん；教区のビジョンをはっきりしていったほうがよいのではないだろうか。
- 森言一郎さん；関東教区はナルドの壺献金などの制度をもっており、教区内の教会員一人当たり一日五円という基準で献金を献げている。そのようなことが東中国教区でもできないだろうか。
- 柴田彰さん；奥羽教区や関東教区は、一

- 教会一牧師体制で自立することを目標に設定している。けれども、私はその体制は維持できないと考えている。だからといって経済的に自立できない教会を教区の重荷とは考えていない。むしろ東中国教区は、そこにキリスト教宣教の現場を持つているわけであり、これは教区の財産なのではないだろうか。いよいよ東中国教区が計画的に宣教プランを策定していくという時期に差し掛かっているのではないか。
 - 森嶋道さん；規模の大小を問わず、どの教会にも与えられた使命があるはずだ。経済的自立が教会の目標ではない。それぞれの教会に特有の目標と、宣教の目的を具体化することが必要とされている。
 - 松田章義さん；かつて教育行政に携わった経験からいえば、小学校などの統廃合は地域の元気を奪うことにつながっていた。教会同士の合併や統合を検討する前に、現在、教職が兼務、代務している教会を、教区がどのように活性化させるかを課題としてほしい。
 - 嵐護さん；諸教会が抱えている課題は多岐にわたっている。よい施策を行うための道は遠くとも完成を待つまでは待てない。できるところから始めていく。そのための教区の長期ビジョンを描かなくてはならない。
- 以上のような発言が活発に取り交わされ、宣教会議の名にふさわしいときが与えられました。最後に会場を提供して頂いた上井教会と田中英也さんに感謝の拍手が送られ、午後五時過ぎに主の祈りをもって会議は閉じられました。

エッセイ

「新しい創造論を始めよう」

倉吉教会 柴田 彰

東日本大震災は、自然に対する関わりを根底から問い直す出来事でした。特に、原発事故被害は、人間の意志を超えた自然災害とは全く別のものであり、生活様式や経済効果を優先した人の傲慢が引き起こしたことを明らかにしました。教会は、命も大地もすべては神の被造物であり神の祝福を受けて存在するものと教え、自然を含めて被造物を語る時、神の祝福に満ちた創造の御業として語ってきました。また、自然現象においても神の摂理を見出すための努力を積み重ねてきました。しかしながら、東日本大震災被害と原発事故は、これまで真摯に問うことのなかった「創造の神を信じる者」との意味を鋭く問い直し、神を信じる者としての新たな在り様を求め、同時にこれまでの創造論の根底を突き崩すものとなりました。



教会が神の創造と被造物世界を語る時には自然は神の被造物世界であることを前提とし、人が神の被造物世界を支配することを神の祝福と理解してきました。また環境破壊を自覚した教会は、被造物世界の中の支配者ではなく管理する者 (stewardship) としての自己理解に至り、被造物の尊厳 (dignity) を視野に入れてきました。近年では、「神は人を導き耕し守るよう」にされた (創二・一五) ことを非神話化する信仰的応答として被造物世界における共存 (co-existence) の在り方を導いてきました。

しかし、福島原発事故は、核融合によって生み出されるエネルギーの本質、またその実現のためになされる環境破壊と現出される環境負荷、被造物世界における歪な経済活動、自然との関わりに内在していた傲慢性を露わにすることとなり、さらに神の創造そのものについての再考を迫るものとなりました。もはや、神の創造を教義の中に閉じ込められた神話ではなく、今を生きる私たちに意味を持つものとして理解し受け入れるのでなければ、時間と空間の中で被造物を地球に生まれさせた神を信じる信仰は虚しいと言わざるを得ない状況に直面しています。神の創造は、過去において完成した出来事ではなく、むしろ完成しつつある出来事として理解すべきではないでしょうか。

現代においては、物質を原子、あるいは陽子、中性子、さらにはクォークのレベルで考えられています。つまり神の創造は、個体ではなくクォークの誕生にまで遡るのです。命について言えば、遺伝子組み換え、



不妊医療などの遺伝子操作が行われ、その成果が期待されています。分野もありません。また遺伝子に影響を与える化学物質が私たちの日常生活の中に違和感なく存在しています。もはや神の創造は、既に完成し

た出来事として論じることが意味がなく、未来に向けた希望の原点とはなり得ません。むしろ、神の創造は、今もなお完成に向かってなされていると考えるべきです。いつでも「今」は、創造の過程にあり、現代に生きる私たちにその完成が委ねられていることを示す新しい神学的視野がここにあります。つまり、単数の創造者 (Creator) による業ではなく、協働の創造 (Co-Create) を想定した創造論の展開が期待されています。それは希望の未来を示す創造論です。新しい創造論の構築を切に願っています。

岡山県西部地区の 夏期学校について

去る八月二日(日)の午後より翌三日(月)午前中までの一泊二日の日程で、鴨方町の遥照山藤波キャンプ場で、毎年恒例になりました岡山県西部地区のCS協議会夏期学校が開催されました。○歳児から一五歳の高校生までの計一〇名の子どもたちと、スタッフや協力してくださる一七名の大人たちが参加する集まりとなりました。

開校礼拝では、「イエス様とつながろう！」を主題にして、笠岡教会牧師の阪西恵理子先生(CS協議会の顧問です)が、「わたしにつながっていないさい、わたしもあなたがつながっていない」(『ヨハネによる福音書』一五章四節)というメッセージの中の「わたし」であるイエス様が、わたしたちの「ぶどうの木」であって、私たちはどのようなしたらその木とつながって、ジューシーで甘くて、とても美味しいぶどうの房になることができるのか、そのためには、まず、その「ぶどうの木」の「枝」につながっていることが必要であって、つながっているからこそ栄養をもらって、美味いぶどうになることができると話されました。「枝」から落ちたぶどうは腐ってしまっ捨てられてしまいます。わたしたちも、イエス様につながるために、教会に行きましょう。お祈りしましょう。そうすると、喜んでお友だちとも仲よくできると思います。そして、一緒に讃美歌を歌いました。子供たちの歌う声は元気で、とても大きな声で、私は、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

それからもたれた分級は、小学四年生以下、小学五年生以上、中学二年生、中学三年生以上高校生までに別れて行なわれました。それぞれの分級を担当した先生が、準備した内容を子供たちと顔を突き合わせて、もつともつとイエス様のお話しを聞いて、心豊かに過ごせますようにと祈りつつ、進めました。玉島教会のスタッフは小学四年生以下の子供たちを相手にして、母親と共話をもつと詳しく、身近に分かりやすくなるようにお話ししてから、子供たちの目がキラキラ輝いていることを確認して、工作のぶどうの木づくりを始めました。色セロファンを丸めて、好きな色のぶどうの房を作る作業です。子供たちは皆、楽しそうに自分なりの房を作っていました。お母さん



たちはぶどうの葉っぱを作ってくれて、とても立派な「ぶどうの木」ができて上がりました。時間が来たので終わりましたが、子供たちの方は、まだまだ終わりたくなさそうでした。「おやつ時間です」との声に、子供たちはいち早く、その場所を離れました。その後は夕食づくりです。お母さんたちのサポートを受けながら、小さい子が包丁で人参やたまねぎ、ジャガイモを切っていくのにハラハラしましたが、先生やお母さんの上手なリードで、上手くできました。飯盒炊飯の方は、玉島教会の名物おじさん二人が(進藤さんと遠藤さん)火の起こし方から説明して、お米をといで火にかけると、数十分で出来上がることに、子供たちはびっくりしていました。やっと出来上がってテーブルに並んだカレーにみな舌鼓を打ち、子供たちは競ってお代わりをしました。食事の後片づけをした後は、いよいよ花火大会です。昨年は打ち上げ花火がなかったと不服そうな意見があったので、今年は派手な花火をして、大きな歓声が上がりました。片づけをした後は、ビデオ鑑賞です。三〇年前にテレビで放送された聖書物語が用意されて、全員で見ました。こうして一日目のプログラムはすべて終わって、バンガローでの就寝時間が来ました。二日目は朝の六時起床で、ラジオ体操をしてから、朝の集いを玉島教会の遠藤先生が行ないました。朝食をすませるとボート遊び、おじさんたちが一緒に乗ってボートをこいでくれました。この時も、大きな歓声が上がっていました。そして、ついにスイカ割りの場面となりました。ビニールシートに大玉のスイカを置いて、三〇メートル

ル離れたところから目隠しをして、周りの人たちの「迷？リード」の声に惑わされながら、子供たちが順番に行ないました。この時が夏期学校の中では最も盛り上がった瞬間ではなかったでしょうか。

楽しいプログラムも終盤となり、最後に感想文を書いて、マビ・マカリオイ教会牧師の石川敬規先生の閉校礼拝でしめくられて、会場の清掃と後片付け、それぞれの荷物の整理をして、キャンプ場の係のおじさんに『ありがとうございます』と全員で挨拶をして、解散となりました。

(報告：仁科優子 玉島教会)

岡山県中部地区における 夏期伝道実習のご報告

中井大介

このたび七月三〇日から九月十三日までの一ヶ月半にわたり、岡山県中部地区伝道協議会（以下「岡山中部」）が夏期伝道実習を受け入れました。

夏期伝道実習とは、大学神学部に在学している学生の中で、牧会志望もしくは牧会に関心を持つ者が登録するインターンシップ制度です。教会を実習の場所として、その交わりの中で育てられ、将来の献身（牧会者や教会で生きようと願う者）の志の育成を目的としています。岡山中部では昨年の夏から一年間かけて協議を重ね、自分たちがどのような教育的環境を提供できるかを検討し準備して参りました。枠組みとしては学生を二人同時に受け入れました。単純に、岡山中部に光明園家族教会を加えた

複数教会が一ヶ月半にわたって実習生を受け入れるためには一人ひとりと全力稼働させてしまうからですが、それだけではなく、実習期間中に学生同士で情報交換したり、客観的に経験を分かち合ったり、互いに協力・相談し合ったりできるための環境を整備するためでもありました。このたび、実習生の派遣を要請した同志社大学にもご理解頂き、学部二年生の前田望さんと、大学院一年生の西澤献さんという多様性を持つ二名を派遣して頂きました。

実習期間中、学生は琴浦教会と倉敷教会にそれぞれ滞在し、主日毎に岡山中部の諸教会を担当、その主日を起点とする一週間訪問や様々な交流、教会や地域のプログラムの実践をいたしました。また、総社教会、新見教会、光明園家族教会には岡山中部の地区プログラムとして広く呼びかけ、それぞれに特色ある宣教の現場を体験する機会となりました。岡山中部のスタッフはメーリングリストを開設して常に学生の活動を共有し、学びの喜びを体験いたしました。とくに私たち自身が、これまでの伝道の中で当然と思っていた活動に対して、学生た



ちが新鮮な反応をし、外部の目から表現してくれる体験には嬉しいものがありました。例えば、岡山中部は三年かけて総社教会再建プログラムを実施していますが、地区の諸教会、信徒教職が力を合わせて一つの教会を盛り立てていくという教会観は学生たちには驚きであったようです。大学の教室では味わえない牧会的体験として強く印象に刻まれたという感想が述べられました。また、地区内で葬儀が執り行われるときには他の実習プログラムに優先して実習参加することとし、実際には二件の葬儀式に関わっていただきました。

キリスト教会は、社会全体における少子高齢化に先駆けた状況を迎えています。キリスト教関係者の全体数が減少しています。信徒になる人も減り、牧師を目指す青年が育まれる環境の規模も小さくなってきています。教会は主体的に牧会者育成に勤めなければ、私たちが継承しているプロテスト教会を将来に引き継ぐことができなくなります。牧会者の要請を神学校だけに委ねるのではなく、現場の教会が担っていくことも大切な時代を迎えています。このたび岡山中部が経験した実習生と共にある期間、確かに「わたしたちの心は燃えていた（ルカ二四章三二節）」ことを確信して語る事ができます。神に感謝。

編集後記

誌面作りを再考し、教会の再生・活性化という喜ばしい記事を巻頭に置きました。東中国教区で為された素晴らしい御業を皆さまと共有し、喜び分かち合えることができれば幸いです。

(A・F)